

ジについてはこのV-プライマーが有効であると考え  
る。そして脱落例を鑑みると、①ピンホールなどの付与、  
②接着面積をできる限り大きくする。③動揺歯には応用  
しない。④銅を含まない合金には使用しない。⑤口腔内

の金属には直接応用しないなどの対策を講じることによ  
り、多数の長所を持っている接着ブリッジの脱落率を少  
なくすることができる考える。

## 9. 北海道地区の口腔インプラントに関するアンケート調査

○越智 守生, 広瀬由紀人, 坂口 邦彦,  
白井 伸一, 松本 弘幸, 加々見寛行,  
八島 明弘, 鳴野 隆博, 神成 克映,  
國安 宏哉, 山崎慎一郎, 木村 和代,  
松原 秀樹, 栗田 宅哉, 富田 達洋\*,  
永山 正人\*, 三嶋 顕\*

(北海道医療大学歯学部歯科補綴第二講座, \*北日本口腔インプラント研究会)

【目的】現在, 口腔インプラントの臨床は確立され, 種々  
の教科書や学術雑誌などから多くの情報を得ることが可  
能である。しかし, 日常臨床におけるインプラント治療  
の実態については, いまだに報告が少ないように思われ  
る。そこで今回, 北海道地区におけるインプラント臨床  
の実態を調査する目的でインプラント臨床の環境, 材料,  
方法などに関してアンケート調査を実施した。インプラ  
ント臨床の実態の把握は, これからの基礎的ならびに臨  
床的研究に対する指針になるとと思われる。

【方法】今回のアンケートは, 北海道地区でインプラ  
ント臨床を日常の診療で行っている歯科医師が所属する  
と思われる北日本口腔インプラント研究会の全会員の134  
名を調査対象とした。方法は一連のインプラント臨床に  
関する質問用紙を郵送し, 回答記入後に返送してもらう  
郵送調査法を実施した。

【結果と考察】アンケート調査の有効回答は合計44通,

回答率は33%であった。アンケートの結果から「日常の  
診療で使用するインプラントの種類」で最も多い回答は  
1種類の28%, 次が3種類の21%であった。「使用頻度が  
多いインプラント」で最も多い回答はAQBの24%, 2番  
目がITIの18%, 3番目がカルシテックとパラゴンの  
16%であった。上部構造の使用材料は, 前装材料にポー  
セレンを使用している回答が硬質レジンよりも多かつ  
た。部位別においては, 前歯部でポーセレンの使用が多  
く, 小臼歯部ではポーセレンの使用がメタル単独(前装  
なし)を使用材料とする回答よりも多かったが, 大臼歯  
部では反対にメタル単独の回答が多かった。また, 固定  
方法はセメント合着が最も多く, 次に術者可撤式(スク  
リュー固定), 仮着の順であった。この結果より, 現在の  
インプラント臨床は機能の回復と同時に審美性の回復が  
より重要視されるようになってきていると思われる。

## 10. スポーツ選手に対するオーラルヘルスプロモーション

○石島 勉, 平井 敏博, 久保田 光,  
池田 和博, 越野 寿, 横山 雄一,  
飯田 一彦, 高田 英俊, 松実 珠千,  
片岡 洋, 中野 健治  
(北海道医療大学・歯・歯科補綴学第一講座)

【目的】スポーツ選手がベストパフォーマンスを発揮す  
るためには, 全身あるいは身体の各部に疾病や障害が無  
いことはもちろんのこと, 日常生活ならびにスポーツ活  
動を支障なく行える身体的ならびに精神的な健康の確保

が不可欠である。この観点から, 近年, スポーツ選手に  
おける全身の健康管理の重要性について, 選手ならびに  
関係者の意識が高まりつつある。しかし, 顎口腔系に関  
しては, 多くの選手がその健康管理の重要性を認識して

いるものの、その健康管理を実践している者がきわめて少ないことが、演者らの調査から明らかになっている。このため、スポーツ選手の口腔の健康を改善しそれを維持していくためのオーラルヘルスプロモーションを、積極的に推進していく必要があると考える。その一端として、演者らは、全日本スキージャンプ選手陣に対して1990年以来実施されている医科学サポート体制に、1992年より参画し、選手の顎口腔系の健康管理を目的として、歯科検診ならびに指導を現在まで継続して行っている。そこで、今回、本活動の効果の意義について考察した。

【方法】対象者は、1992年から1997年までの6年間に、演者らがスキージャンプ選手に対して行った9回の歯科

検診ならびに指導を受けた76名である。各回の検診結果から、対象者のう蝕罹患率、未処置う蝕歯数およびその所有者率、要治療第3大臼歯数およびその所有者率を分析した。さらに、検診後の歯科受診状況について検討した。

【結果および考察】本活動を開始した後、多くの選手は歯科医療機関の受診を開始し、選手の口腔内における未処置のう蝕歯や要治療第3大臼歯の数は顕著に減少した。このことから、スポーツ選手における口腔の健康の維持・増進をはかるには、継続した歯科検診ならびに指導が有効であることが示唆された。

## 11. Er:YAGレーザーErwin® の臨床応用

○川上 智史, 荆木 裕司, 永井 康彦,  
尾立 達治, 原口 克博, 塚越 慎,  
松田 浩一

(歯科保存学第二講座)

近年、歯科領域において、CO<sub>2</sub>レーザー、Nd:YAGレーザー、Er:YAGレーザーが、広く応用されるようになってきた。本学総合診療室においても平成8年5月に、水によく吸収され、水分に富む生体組織に対して高い蒸散能を示し、硬組織切削を主用途としたEr:YAGレーザーErwin® (ERW1:HOYA,MORITA) が導入された。本レーザーは、波長が2.94μmで水の光吸収波長帯のピークに一致しているものである。その硬組織切削の原理は、歯を構成するハイドロキシアパタイト結晶周囲の水分を気化し、アパタイト間の結合を破壊することによる。このことから、従来のエアタービンによる切削とは異なり不快な高周波音や切削による影響も少なく、疼痛の発現はほとんど生じないと言われている。また本レーザーは、

同様に歯の切削が可能と言われているCO<sub>2</sub>レーザーの熱作用による歯の崩壊と異なり、歯髄に対する影響も少ない。当科では、導入以来、平成10年12月までの2年8ヶ月間に、コンポジットレジン窩洞形成97例、鑄造修後の窩洞形成3例、象牙質知覚過敏症13例、口腔軟組織においては、口内炎に16例、メラニン色素沈着症に5例、根尖性歯周疾患の処置23例にErwin® を用いた。その結果、いずれの症例においても、治療経過とその効果において、概ね良好な成果を得ることができた。

今後は、モリタ製作所と共同研究を行っているコンタクトチップの開発を成功させることにより、形成にやや難のある鑄造修復窩洞形成の完熟度を高め、エアタービンに代わり得る切削器具を目指したいと考えている。

## 12. 本学歯学部附属病院における院内感染事故の発生状況とその防止策について

○荆木 裕司<sup>1)</sup>, 家子 正裕<sup>2)</sup>, 小鷲 悠典<sup>3)</sup>,  
坂口 邦彦<sup>4)</sup>

(保存学第二講座, 院内感染対策委員会<sup>1)</sup>, 内科学講座, 院内感染対策委員会<sup>2)</sup>,  
(保存学第一講座, 院内感染対策委員会<sup>3)</sup>, 歯科補綴学第二講座, 歯学部附属病院長<sup>4)</sup>)

院内感染防止対策の立案と実行について最も重要な事項は、現行の院内感染対策とその実情の把握である。次に問題点の抽出を行い、対策の策定、改善を行う。した

がって、感染対策には各医療施設の特性が反映される。そこで以上の業務を効果的に行うことを目的として、本学歯学部附属病院にも院内感染対策委員会が設置され、